

## 自由意志信念の社会的機能

松本龍児 (Ryuji MATSUMOTO)  
東京大学

唐沢かおり (Kaori KARASAWA)  
東京大学

近年、社会心理学の領域では「自由意志が存在すると思うかどうか」という自由意志信念をめぐる研究が行われてきている。具体的には、実験法を用いた研究では、参加者に自由意志の存在を肯定あるいは否定する文章を読ませることによって自由意志信念を操作した上で、後続の判断や行動を測定することで実証的な検討を行っている。これまでの研究によって、自由意志信念は不正行為、攻撃行動、援助意図、同調、量刑判断、感謝感情などの極めて広範な社会的判断や行動と関連していることが示されている (Alquist & Baumesiter, 2010; Baumeister, Masicampo, & DeWall, 2009; Shariff, Greene, Karremans, Luguri, Clark, Schooler, Baumeister, Vohs, in press; MacKenzie, Vohs, & Baumeister, 2014; Vohs & Schooler, 2008)。

これらの個別的知見を統合すると、自由意志信念は「自己コントロール」の促進と「責任帰属」の促進という 2 つの機能を持っていると考えられる。第一に、自由意志の存在が否定されると、自己の衝動的反応を抑制する動機づけが低下するため、不正行為や攻撃行動などの衝動的な行為が増加すると考えられる。第二に、自由意志の存在が否定されると、他者への道德責任の帰属が低下するため、犯罪者への量刑判断が寛容になったり、援助者への感謝感情が減少したりすると考えられる。さらに、これらの 2 つの機能はいずれも人々の社会への適合を促進する役割を持っていると考えられる。すなわち、全体として自由意志信念はわれわれの社会生活を支える適応的な機能を持っているといえるだろう。

本発表では、まず上述の経験的データにもとづいた心理学的知見を紹介した上で、自由意志信念が持つ社会的機能の包括的なモデルを検討する。さらに、これまでの研究の問題点や限界を指摘し、今後の研究の展開や新たな視座を議論する。